

---

# ひきこもり

ただ書く人

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ひきこもり

### 【Nコード】

N4875Y

### 【作者名】

ただ書く人

### 【あらすじ】

いつからなのかわからないが、わたしは扉のない部屋で生活している。

玄関の扉はなく、浴室やクローゼット、冷蔵庫の扉もない。

どうしてこうなってしまったのか。誰かが何かの目的でわたしをこの環境に置いたのか。

何もわからないが意外と快適な生活でもあった。しかし……。

「たんとんとショートショート」というサイトに掲載済みの作品

です

扉というものは、主に出入りする場所に設置される。そこに設置されているからこそ扉なのだろう。

家の扉は人や動物が出入りするし、冷蔵庫の扉は人の手や卵や野菜などが出入りする。

家の扉を開けて一歩外に出ただけで、寒風に凍えたり、高く白い雲が見えたりする。

職場の自動扉を抜けて一歩中に入っただけで、気持ちに張りが出たり、憂鬱になったりする。

扉の先は世界が違っていて、扉を使って世界を行き来できる。

ここには扉がない。

いつからこうなってしまったのだろう。

いつからわたしはここにいるのだろう。

広いワンルームにわたしはいる。ここは確かにわたしの家だった。

今もわたしの家だ。

白い壁紙は以前から変わってはいない。自分で組み立てた本棚も、そこに並んでいる書籍も、以前と変わらぬもの。机も絨毯も時計も以前のままだ。

しかし、変わったものの方がたくさんある。窓が小さくなった。南側にあつた一間幅の窓はなくなり、手の平ほどの大きさの窓が三つ並んでいる。冷蔵庫には扉がなく白い冷気が前面に漂っている。キッチン下の収納にも扉がない。クローゼットにも浴室にもトイレにも扉がなく、便座の扉すらなくなっていた。何よりも玄関の扉がない。

わたしは閉じ込められているのだ。

いったい誰がわたしを閉じ込めたのだろうか。

最初はわたしがいない時に誰かが工事をしたのだろうと思ったが、

それは無理な話だった。

わたしがいない時に工事をしたのだったら、扉のないこの部屋にわたしはどうやって入ったというのだろうか。

しかし、その可能性も考えなければならぬ。

わたしがいる時にわたしに気付かれないようにして、部屋からすべての扉を消し去って窓のリフォームをした。

わたしがいない時に、部屋からすべての扉を消し去って窓のリフォームをして、その後わたしをこの扉のない部屋に移動させた。

このどちらかの可能性しか考えられないのだ。

いずれにせよ、わたしと同じような一般的な人間の所業ではなく、異星人や異世界人だったり、未来人や超能力者だったり、そういう存在によるものだろう。

そんな存在が身近にいるとは信じていなかった。今でも信じているわけではないが、そう考えざるをえない。

職場に行くことができなくなった以外は、わたしの生活はあまり変わっていない。

確かに職場とこの家を往復する毎日だったが、こうまで変わることがないとは思わなかった。

最も心配されることは食事だが、どうしてか冷蔵庫の中には十分な食材が常に入っており、米びつが空になることはなかった。

元よりひとり暮らしなので、風呂もトイレも扉がないからと気にすることはない。風呂に入ると少々部屋の湿度が上がってしまう程度のことで、これにはすぐに慣れた。そういえば最近風呂に入っていない気がする。

この環境に気付いた時は、風呂や冷蔵庫にビニール袋などを使って仕切りを作ったりもしたのだが、それは次に見た時にはなくなっていた。

誰かがそれを望んでいないのだろう。

水やガス、電気は供給されており、テレビも視聴できるし電話やイ

ンターネットも使うことができる。

わたしはもっぱらオンデマンドで視聴できるサービスを使って映画を観たり、家にある本を読んだり、電子書籍やゲームソフトをダウンロードして楽しんでいる。

この生活をどれだけ続けているのか自分でもわからないのだが、今のところ飽きることはないし、このままでもいいだろうと感じている。

もちろん最初は外に出ようと苦心をした。

小さな窓から出ようとしてみたり、本来玄関の扉があるべき場所にあった壁紙を剥いてみたり、その壁を壊そうとしてみたり、いろいろやったものだ。

しかし、窓はあまりに小さく、壁には小さな穴を開けることしかできず、何をやっても気付けば元の通りに修復されていた。

電話やインターネットが通じるので、外部に連絡をつけることはできる。

この状況に気付いて次の朝になった時、職場に電話をかけ事情を話して出勤できるかわからないと伝えたのだが、電話口の先の上司は信じたのか信じなかったのかわからないが、あっさりと休暇を認め、以降向こうからは連絡がなく、わたしも連絡をしていない。わたしはいなくても業務に支障のない人材だったということだろう。

それ以来わたしは外部への連絡をしていない。

警察や消防に連絡をすることを考えたこともある。最初に考えたことはこれだったかもしれない。

しかし、わたしはひとつの不安のために、それをする事ができなかった。

わたし以外の人間がこの部屋に入ったらどうなるのか。

もしかしたら外からは以前までのように扉を使って入れるのかもしれない。そうでなければ、外から壁を壊して誰かがこの部屋に入ってきたとする。その誰かはこの部屋から出られるのだろうか。その

誰かが部屋に入った後に扉が消えてしまったら、壁が修復されてしまったら、その場合はこの部屋で他人と生活しなければならなくなってしまう。これは絶対に避けなければならない。

では、扉を開けてもらったまま、あるいは、壁を壊してもらったままの状態で部屋に入らないようにしてもらって、わたしが外に出ればいいのか。部屋に入らないように伝えても部屋に入ってしまう者がいる可能性はあるだろう。

こう考えると救出してもらうために外部に連絡することは危険な賭けなのだ。

両親や兄弟、友人にしたって同じことで、むしろ部屋に入ってきてしまう可能性が高い。気の置けない仲であっても、このワンルームで他の人間と生活などしたくはない。

わたしは、そのような賭けに出る決意をするほどにこの環境での生活が嫌ではない。

この部屋は外から見たらどうなっているのだろうか。

この集合住宅は、隣も上も下もどの場所にも同じような部屋が並んでいる。

ひとつだけ扉がない部屋があったら、ひとつだけ窓の形が違う部屋があったら、しかも突如にしてそうになっていたら、見かけた人は、特に他の住人はどう思うだろうか。ひとりくらは管理人に連絡をするだろうし、管理人が訪問してきたり、電話をかけてくることが考えられる。

それがないということは、外からは何も変わっていないように見えるのか。あるいは、以前からこうであったかのように認識させられているのだろうか。

わたしをこの環境に置いた誰かだったら、その両方が可能なのだろうか。

小さな窓から見える景色が以前から見えていたものと変わらないので、集合住宅の場所は変わっていないはずだ。

窓から通行人の姿を見ることが出来る。その姿を見て、この部屋の中以外は以前までと変わらぬ生活をしていることがわかる。

しかし、あるいは、そのように誰かによって見せられているのかもしれない。テレビからの情報も誰かがわたしに見せているだけかもしれない。すべての情報は捏造で、世界の全員が誰かによって閉じ込められているのかもしれない。

そうすると、冷蔵庫に置かれている食材も幻影で、わたしは何も食べていないのかもしれない。わたしが飲んでいる水は誰かの血液かもしれない。この壁はマジックミラーのように外から中の様子が見えるのかもしれない。ここは太陽も見えない惑星かもしれない。閉じ込められてから1時間も経っていないのかもしれない。百年経っているのかもしれない。これはわたしの夢かもしれない。これは誰かの所業ではなく偶然に起こった事故かもしれない。鏡に映るわたしはわたしではないのかもしれない。

哲学者で似たようなことを言った者があつた気がする。

すべてがありえないことのように、実際に起こっている事象を考えると、ありえることだった。

考えすぎると狂ってしまいそうで、わたしはあまり考えないようにした。

わたしはわたしであり、この状況は誰かが故意に作り出したものだ。これが現在のわたしの結論である。

では、その誰かの目的は何だろうか。

ひとつはわたしを観察し研究することが考えられる。人間がこのような環境に置かれた場合にどのような行動をとるのか、といったところだろう。もしそういった目的であれば、いずれ研究が終わってわたしは解放されるのかもしれない。記憶を消されるということも考えられる。

次に飼育の可能性がある。誰かがわたしをペットのようにこの環境で飼育しているのだ。突飛な発想だが、水や食物、娯楽が与えられ



ている理由にはなる。この場合、わたしは死ぬまでここで暮らしていくことになるのだろうか。

もうひとつ、目的などないということも考えられる。こどもが蟻の巣の出入口を塞いでしまうように、誰かがほんの気まぐれ程度にわたしをこの環境に置いたのかもしれない。その誰かは、もうわたしのことなど忘れてどこかで笑っているのかもしれない。

いずれにせよ、わたしは永遠にこのままかもしれないし、解放されるかもしれない。殺されてしまうことも考えられはないが、なんとなくそれはないだろうと感じている。研究などのために、つがいとなる相手を放り込まれる可能性もある。そう考えると、どうしてか学生時代に交際していた女が思い起こされた。

疑問に思うのは扉がないことだ。

わたしを閉じ込めるためだったら、窓と玄関の扉をなくしてしまえば十分だろう。それがどうして扉という扉すべてがなくなっているのか。

何かの研究の目的のためだろうか。あるいは、わたしが自身の体や他の何かを扉の向こうに隠すことがないようにしているのか。後者だったら衣服や布団を使って隠すことはできるし、わたしをこの環境に置いた誰かならば衣服や布団を消してしまうこともそれを透かして見ることもできるのではないかと思われる。では、研究のためだろうか。

人は扉がないとどのような行動をとるのか。

ご覧の通り、扉がなくても大して変わりはない。いろいろな違和感や不便を感じることはあっても、慣れればどうということはない。扉がなくても浴室は浴室であり、冷蔵庫は冷蔵庫だ。そこには簡単に出入りできる。

扉がなくても世界は違っていて、扉を使わなくても世界を行き来できる。

わたしは誰かの目的が、扉をなくすことで異なる世界をなくし、世界をひとつにすることだとも考えたが、そんなことにはなりえない

のだ。

それならば、まずなくすべきは、壁や囲いといったものだろう。

結局は目的もわからない。わからずにわたしはここで生活している。あるいは、ここはわたしが望んだ世界なのかもしれない。

それが解放なのか死なのかはわからないが、終わりが来るまではここでの生活を続けていこうと思う。

一度そう決めてしまえば、ここでの生活は十分に楽しいものだ。衣食住に加えて娯楽までも揃っている。

ひとりならば怒りも憎しみもなく、攻撃されることもない、争う対象のいない平和の中にいられる。

人類が望む平和は、わたし以外の人類がいなければ簡単に手に入れられるのだ。

わたしがこう考えたことがわかるのだろうか、それとも偶然のことなのか、突如部屋の中にチャイムの音が鳴り響いた。

予想もしていなかったことに体を動かすことができず、ただ首を動かして玄関の扉があった壁を見つめると、そこにははずの扉が開いてひとりの男が顔を覗かせている。

男は警察官の格好をしていた。

扉が開いたことに驚いて、わたしが何も言うことができず立ち上がりもできずにいると、その男は何やら挨拶の言葉を並べながら家に入ってきた。

わたしが状況に気付いて慌てて制止した時にはもう遅かった。

扉は閉じて壁になってしまい、警察官の格好をした男が部屋の中にいた。

わたしと同年代の見知らぬ男だ。警察官ではないのだろう。誰かに送り込まれたもので人間ではないのかもしれない。

わたしはすぐにこの部屋で自死する方法を考え始めた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4875y/>

---

ひきこもり

2011年11月17日19時17分発行